
Last Smile

町田竜祐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last Smile

【Nコード】

N1313I

【作者名】

町田竜祐

【あらすじ】

【Black Eleven】

黒沢洋介、松本康次、北沢諒子、工藤謙治、中山強、斎藤孝志、木村絵里、星野和義、今井竜、高橋和也、松本広一をメンバーとする史上最悪の犯罪グループ

何が原因で、また何が目的で彼らが数万人もの人々を残虐したのかは闇のままだが、警察との銃撃戦により、警察側の死者は計り知れ

なかったが、グループは壊滅

ただ1人生き残ったリーダー洋介も警視山口大介との最後の戦いで
自決

8年に及ぶ死闘は幕を閉じたと思われていた……。

事件の終わり（前書き）

この小説は作者が中学2年の頃に執筆した作品であり、まだ世の中について理解していなかった頃に執筆したことをご理解ください。
この物語はフィクションです。

事件の終わり

「…警視…口警視…山口警視…山口警視…！」

ハッと目を見開いた。目の前には部下の顔。

「どうしました？ボーっとして…」

部下の心配そうな口調に照れ笑いをしながら、

「いや、こつちのことだ。気にしないでくれ。」

とだけ一言言った。

「…それならいいんですが…あッ！！珈琲置いときますね」

「ああ、ありがとう…」

大介は力無さそうに言って、珈琲を一口啜った。

大介はまた考えていた…

あの日のことを…

あの一生分の名声を得られた、あの日のことを…

あの日以来、大介のまわりでは『一生安泰』やら『日本の英雄』や

らの話で持ち

きりになった。

しかしそんな話を気にしてないわけではないが、大介は洋介の最後のことをいつ

も考えていた…

あの、信じられない光景を…

「ハア…ハア…ハア…」

昼間なのに薄暗い工場の中。洋介は大介に撃たれた右足を庇いながら懸命に逃げ

ていたが、ついに大介に見つかった。

「…あの煙幕の中から抜け出し…かつ俺を見つけるとはな…。」
洋介は力なく笑った。

「おまえの右足から流れ落ちた血の跡を辿っただけだ。」

大介は無表情で言い、拳銃を向けた。

「署で話を聞きたい。なぜ、こんな残虐行為をしたのかの理由を…

…！」

「…撃てよ…。」

洋介は一言だけ言った。

大介は少しも顔色を変えずに、今度は左足を撃ち抜いた。

「グッ…！！」

洋介は倒れた。大介は洋介へと歩きだす。

「…待てよ…。」

洋介は薄ら笑いを浮かべて、上着の胸の内ポケットからある機械を取り出した。

大介はひるんだ。その隙を洋介は見逃さなかった。

『ドンッ…！！』

大介は倒れた。洋介の隠し持っていた銃で撃たれたのだ。

「ハッハッハ…！！バカめが…油断なんぞするもんじゃねえぜ…」

大介はうめきながらも必死で立ち上がり、拳銃を再び洋介に向けた。するとさっきの銃声に気付いた大介の仲間が集まってきた。

「警視！！大丈夫ですか！？…貴っ様ああ！！！！」

仲間の一人が洋介に銃を向けたが、大介は咎めた。

「こいつは…自爆装置を持ってやがる…。むやみに手を出すな…。」

「しかし…グッ…！！」

大介は驚いて洋介を睨み付けた。洋介が仲間を撃ったことに対して思わず逆上してしまった。

「き、貴様あ…！！」

大介は引き金を引いたその刹那…

目の前に1人の少女が現れたのだ。洋介を守るようにして…

女は倒れた。

「な、なんで…？ま、まさかさっきの銃声を聞いて…！！とにかく、救急車だ

…！！はやく！！」

大介が仲間に振り向いたその時…銃声が鳴った。

仲間が放った弾丸は洋介に命中した。

「…は、離れろ…！」

洋介は女に言ったが、まったく動かなかった。

「…お、おい、刑事！！この子を…」

その時、洋介の体は少女もろとも爆発した。

大介は口をわなわなと震わせながら、目を大きく見開き、呆然としまま立ちす

くんだ…。

再会

…目を開けると見知らぬ世界だった。

洋介は、いや洋介と呼ばれていた男は、起き上がると頭を掻いた。
『ここはどこだ？』男はそう思うと、ふらつく足で歩きだした。

しばらく歩くと人が集まっていた。そいつらは皆、男に気が付き、
一斉に集まってきた。

「おい、おまえ！！ここはどこだ！？」

一人、30代くらいの男が男に向かって話かけた。

「…知らない。」

男がそう答えると、その男はチツッと舌打ちし男から離れていった。

そこにいる人々は皆、ここがどこかを知らず、記憶さえも失っていた。

もちろん、男も同様だった。

自分がなぜ、このような世界にこなければならなかったのかと自分に
問い掛け続け、ただひたすら歩くしかなかった。

そこは広がった。

空は青いというか光輝いて、地面は植物もなく岩と土がむき出しに
なっていた。

いったい何人いるのかわからない大勢の人々が「ここはどこだ？」
と言葉を交わしている。

男は適当な岩にもたれかかると、いつしか眠りについた…。

いったい、何時間眠ってしまったのだろうか？

男は目を覚ました。

空は相変わらず光輝き、昼も夜も、いや、時間の感覚がない世界だ。何時間眠っていても、おそらくこの空はこの空のまんまなんだろう…。

ふと、男は目の前に立っている女に気が付いた。

「……………あれ？どつかで……………」

突然、男の脳に爆発が起こった。するとそれと同時に一つずつ映像や言葉が頭の中に生まれってきた。

そして爆発が終わると、その女に対する記憶が戻っていた。

「……………諒子……………」

女はクスツと笑い、

「洋介もきちやっただ…」

と悲しげに言った。

と同時に爆発。

「そ、そうか！！俺の名前は洋介か！！」

子供のように叫ぶと、諒子は微笑み、手を差し出した。

「みんな、あなたを待ってるわ！！来て！！あなたの記憶を取り戻してあげる！！」

洋介の脳に続け様の爆発が起こったのはいうまでもあるまい。

かつての『ブラック・イレブン』の仲間たちに出会い、洋介はほぼほとんどの記憶を取り戻した。

しかし、それは他の仲間たちも同じだった。

「ここでは記憶がない者、そして記憶を共にした仲間がいないと永遠にこの世界を彷徨い続けるのよ。」

諒子は目を細め、人々を見た。

「彼らはいったい何年、ここを彷徨い続けているのでしょうか…？」

おそらくこの中には自分たちが殺した人も含まれているのだろうか……？

そう思うと、洋介は胸が苦しくなった。

「……とりあえず、洋介も来たんだしいくか!!」

仲間の1人の大柄の男が威勢よく言った。

「……いったいどこへいくんだ? 強」

強と呼ばれるその男は大声で笑い、

「蘇りの試練にいくんだよ」

と言った。

洋介はポカンとして強を見つめた。

諒子がそつと教える。

「……つまり、記憶と共にする者が集まったとき、蘇生するための試練を受けられるのよ。」

洋介は怪訝な顔をしたが、強の「とにかくいくぞ!!」という声に圧倒されついていった。

……その時だ!!

洋介の頭の隅に一人の少女のシルエットが浮かんだのは。

自分の目の前に手を広げて立ちはだかった、1人の女のシルエットが……

「どうしたの?」

諒子は心配そうに洋介に聞いた。

「……まだ、あと1人いる……」

洋介は俯きながら答えた。

「強!! 待って!!」

諒子は大股で歩く強を呼び止めた。

「…ああん？どうした！？」

強はゆっくりと後ろを向きながら聞いた。

「洋介があと1人いるって…」

強は口をポカンと開けて、洋介に向かって歩いていき、頭を叩いた。

「洋介。まわりをよおく見渡してみろ。11人揃ってるぜ。」

強は洋介の顔を覗き込みながら言った。

「…違う」

「ん？」

「違うんだ！！多分まだ俺の記憶が戻ってないからわからないが、俺にとって大切な人のような気がする！！」

洋介は強に向かって叫んだ。強は口を手をあて、

「…お前の大切な人は諒子じゃねえのか？」

と言った。諒子は「ちょッ！？」と言って強の頭を叩いたが、洋介は「そういう意味じゃねえ！！多分だが…」と叫んで走りだした。

「お、おい、待てよ！！こんな広い大地の中をたった1人の女を捜すなんざ不可能だ！！」

強は叫んだが、洋介は走り続けた。

「…あんのやる…！！死にやあなんとかなると思ったが、生前となんら変わっちゃいねえ…」

強も洋介の後を走りだした。

急に洋介が止まった。

「…おい！！洋介、いく…」

洋介の肩に手を乗せた強がとっさに黙った。

目の前に少女が倒れていた…。

この時、洋介の脳には爆発が起こっていた……。

仲間

「…どうすんだよ…？その子…」

竜が怪訝そうに聞いた。

竜と呼ばれる背の高い男は洋介の幼なじみに当たる

「とにかく連れていく！！俺を助けてくれた子だ！！」

洋介は竜に語気強く言い放ち、諒子のほうをちらッと見た。

諒子は心配そうに少女を見つめていたが、洋介の視線に気付くと、
ゆっくりと頷いた。

どれだけの距離を歩いただろうか…。

目の前には大きな神殿があった。

中に入ると人の気配はなく、強が先頭に立って歩いていった。

「記憶の神殿ね…」

諒子は溜め息まじりに言った。

「記憶がなきゃ、決して見るできないものよ。」

しばらく歩くと、広い部屋に出た。

「…ここは？」

強が辺りを見回しながら言うと、どこからともなく声が聞こえてきた…。

「…蘇りの試練を受けるか…？」

一同は驚き、辺りを見回した。

「誰だ！！？どこにいる！！？」

洋介は叫んだ。しかし返ってくる答えは同じだった。

「…蘇りの試練を受けるか…？」

洋介は声に向かって叫んだ。

「受けるためにここにきた!!」

声はしばらく止み、代わりに右の壁が開いた。

「いくがよい…」

声は一言だけ言うと、プツツリと聞こえなくなった…。

洋介は右の壁に開いた扉から溢れる光を睨み付けた…。

すると、洋介が抱えている少女が目を覚ました…。

少女は瞬きを2回すると、洋介と見つめあった…。

「…あなたは…」

その少女は洋介の顔を見て、首を傾げた。

「覚えているか…？」

洋介はゆっくりと少女を降ろしながら聞いた。

「刑事の顔は思い出せないが、俺が撃たれそうになった時、君が手を広げ、目の前に立ちはだかったことを…？」

洋介は少女の目をじっと見つめた。

「すこしだったけど、思い出した気がする…。」

洋介は微笑み、「そうか…」と言った。

「俺の盾になってくれたのに俺が死んじまったら、君は無駄死にだったな…。すまなかった…」

洋介は少女に向かって頭を下げた。少女は何も言わずに、ただ洋介を見ていた。

頭を上げた洋介は「君も蘇りの試練を受けないか？」と言った。少女は目をパチクリさせる。

「驚くのも無理はない。俺も最初聞いたときはな…。」

「それは私でも受けられるの…？」

少女は胸に手を当てて尋ねた。「もちろんさ。」洋介はそう答えると、「俺のために死んでしまったから、今度は俺が命に変えても必ず蘇らしてみせる。」と洋介は力強く言った。

少女はニツコリと笑って「うん。」と答えた。

洋介はみんなを集めた。

「俺たちは生前、たくさんの人を殺した…。俺はその罪を償うため、もし蘇ることができたならば、今度こそは逆に人々のためになるよ。うな一生を送りたい!!」

そこでみんなにお願いがある!!もしみんなも蘇ることができたら、また俺に力を貸してくれないか?頼…」

「頼まれなくてもそのつもりだよ!!」

洋介が言いおわらないうちに、強が口をはさんだ。

口に笑みを浮かべた強はみんなに向かつて「なあ、お前ら!?!」と言った。

すると、メンバーから口々に「当たり前じゃないですか、何を今更…」「話ってこんなことかよ!!」というような言葉が聞こえ、笑いになった。

洋介はそんなメンバーの思いがうれしく、笑いながら俯き、目には涙が溢れた。

諒子は洋介の背中をポンツと叩き、それがさらにうれしさを増した。

「あれ!?!洋介泣いてんのかよお!?!」

強がわざとらしく叫んで、みんなも口々に「ほんとだ泣いてる」「これだから心配なんだよなあ」というような言葉が聞こえ、「うるせえ!!」と洋介はやケになって叫んだ。

「…お前ら、最高の仲間たちだぜ!!ぜってえ、11人と1人、12人で蘇ろうな!!」

洋介が涙を流しながら言う「おう!!」と仲間たちが答えた…もちろんその後、笑いに変わった…。

発端

神殿を出たあと、一同は歩き続けた。

歩き続けて、試練なものにもかかわらず何も起こらないので油断したのかもしれない…。

一同は12人で少しの休憩時間にしたのである
確かに12人で…

だが…！！

「広ーがない！？」

洋介は驚いて竜に聞いた。

「ああ…少し目を離れたすきにいなくなっちゃった！！」
竜は慌てて答える。

「どういうことだ？いったい、どこへ！？」

洋介は辺りを見回しながら、「広ー！！」と叫んだ。

「みんな落ち着け！！とにかく手分けして捜そう！！」

副リーダーの康次は素早く3つの班に分かれさせた。

「…とりあえず、茜の記憶は洋介にしかないようだから離れさせてはダメだ。そして力のない茜を守るために、竜と強を同じ班に。あとは諒子をいれて1つの班だ。」

次の班は、謙治、絵里、和義の班。

そして残った孝志、和也は俺と。」

茜というのは、あの少女の名前である。

「よし、わかった！！手分けして捜し、1時間の間隔でまたここに

集まろう!!
行動開始!!」

「しかし、ただっ広え世界だぜ…」

康次は呆れながら言った。

「広一はいつたどこにいつてしまったのでしょうか…?」

和也が心配そうに康次に聞く。

「知らねえよ、俺に聞くな!!」

康次は語気強く言い放った。

「…じゃがの…」

孝志の言葉に2人は振り向いた。74才になるこの白髪の老人は豊富な経験でメンバーからの信頼を集めていた。

「この世界で死ぬと、どうなるか知ってるか?」

孝志の言葉に対し、すぐさま和也が答える。

「ど、どうなるんですか?」

孝志は和也をチラツと見ると、声を落とした。

「あの世にもいけず、蘇ることもできず、永遠に闇の中を彷徨うんじやて…」

2人の背筋に寒気が走った。

その時、右の方向に何か大きい生きもののようなものがいた気がした…

康次が右を向くと、何もなかった……

「こ、康次さん…」

和也が康次の肩を叩いた。

「ど、洞窟ですよ…」

「洞窟？」

康次は息を飲んで入り口付近に立ち中を見た。

「暗いし、深いな…こりゃ」

康次は2人のほうに振り向くと、

「とにかくみんなを連れて入ってみよう!!」

と言った。これに対して和也が強い口調で言った。

「みんなって…!!みんな集まるまで時間がかかりますし、もしこの中に広一がいたら…」

和也は口をつぐんだ。

康次も少し不安になっていた。

先程、右に感じたでつかいイカやタコのような生きものはなんだったのだろうか？

気のせいなんかじゃない気がする…と。

「入ってみよう…」

康次はゆっくりと言った。

「ただし、広一がいないようならすぐさま出る。」

いりくねった迷路のような通路、湿った床、カビの匂い…

洞窟の中はひどかった。3人は何回も吐き気をもよおし、極端に暑い中汗を拭いながら奥へ奥へと進んでいった…。

しばらく歩くと光が見え、広い袋小路に出た。

大きな泉があるが、その水は決して飲めそうではなく、ピンク色に濁っていた…。

「なんだ、ここは？」

そう康次は言くと、水面に顔を近付けた。

自分の顔が反射している。

あとの2人も水面に顔を近付けた。

「何も見えませんね。」

和也はそう言つて、体を仰け反らせた。

「……………ちよつと待て!!」

孝志は何か思いついたような口調で言つた。

「…どうした!？」

康次は驚いて孝志を見た。

孝志は指で康次の水面を指し示した。

「そ、それ、顔じゃないか？」

康次は自分の水面を見て、「俺の顔が歪んで見えるだけだろ」と言つた。

「おかしいですよ。」

和也は即座に答える。

「だって僕達が覗いた水面は濁りすぎて顔なんか見えないんですよ!!」

康次は慌てて別の場所の水面に近付けた。顔は映らなかつた。

「ちよ、ちよつと待て!!それじゃ、この顔…」

3人は顔を見合わせた。

「広ーい!!」

和也は水の中に手をのばした。が、孝志はその手を抑えた。

「俺がみんなを読んでくる!!おまえら動くんじゃねえぞ!!」

康次はそういつて、元きた道を走り出した。

「広ー!!広ー!!」

孝志に押さえ付けられた手を必死に振りほどいて、和也は手を水の中に入れた。

その時…!!

和也の手に何かが絡みついて、和也を水の中に引きずり込んだ……。

死闘

「和也あー!!」

孝志は水面に向かって大声で叫んだ。

しばらくすると、巨大な触手に絡まった和也が水から出てきた。

「和也!! 手を伸ばしなさい!!」

触手は一層絡まり、和也は呻いた。

「おのれ… 和也を離せ!!」

孝志は仕込み杖をとり、触手に切り付けた。

「ぎゃああうお!!!!」

水面から叫び声がし、和也は水面に落とされた。

孝志は和也に「手を伸ばせ!!」と叫ぶと、和也の手を掴みひっぱりあげようとした。

しかし和也の体にまた、いくつもの触手が絡みつく。

刃を突き立て触手を何度も何度も振り払い、やっとのことで和也を助けた。孝志は息をついた、その刹那…

今度は孝志に触手が絡につき、水の中に引きずり込んだ。

孝志は水面に浮かんだ杖を掴もうと必死にもがいたが、杖は水の中へと消えていった。

「孝志さん!!」

和也は起き上がり、手を伸ばした。

「孝志さん、掴まってください!!」

和也は必死に手を伸ばす。

「ばっ、馬鹿もん!! 引っ込めろ!! 触手が絡まる!!」

孝志は和也に叫んだ。

「和也、お前もこの事を洋介たちに報告しに行きなさい。ワシなんぞにかまうな…」

和也は腕を引っ込め、立ちすくんだ。

「生きる、和也…。蘇り、自分のやりたいように生きる…。お前は、

まだ若い…さあ、行け…!!」

和也は孝志の言うことに従い、振り替えて元きた道を歩きだした…その時…!

またもや振り返り、助走をつけて泉に向かって走り出した…。

「おおおおお!!!!!!」

和也は叫んだ。

「孝志さんを返しやがれえ!!!!!!」

「よせ!!和也!!!!!!」

孝志が叫び終わる頃には、和也の体は宙に浮いた後だった。そしてそのまま泉に落下した。

「か、和也…この馬鹿野郎!!!!」

和也の体にも数千もの触手が絡み付き、力なく水に浮く和也に対し、孝志は叱咤した。

「す、すいません…でも、俺、孝志さんを助けたくて……」

和也の体はゆっくりと沈み始めた。その時、孝志はすべてを察知した。

この泉自体が生きものだったのだ。この泉では抵抗すると触手の締め付けが強まり、浮かぶものは沈んでいき、この泉の体の中に入る…そんな具合かと…。

「た、孝志さん…」

和也がゆっくりと手を伸ばした。孝志はその手をしっかりと握り締める。

「…洋介さん、怒るかなあ…?」

和也は涙を浮かべ、孝志の顔を見た。孝志も涙を浮かべて、

「…当たり前だ、馬鹿もん…!!」

涙が頬を伝った…。

「…すいま…せん…」

和也は微笑み、ゆつくりと水の中に消えていった…。

「…ワシも…すぐにいくよ…」

孝志は和也が沈んだあたりに向かって微笑み、ゆつくりと天井を見上げ、目を閉じた…。

【残り9人】

迷

康次は走り続けていた。

異様に暗い、暑すぎる通路をハアハアと息を切らしながら…。

もう何時間走っているのだろうか。

いつまでたっても出口が見えず、康次は腰に手をあててその場に立ち止まった。

「…ど、どうなってやがんだ…？」

康次は走って来た道を振り返った。闇だった。

急に頭上でバサバサと音がし、康次は驚いて上を見上げた。

「…こ、蟬か…ちくしょう、脅かしやがって…!!」

康次はまた前を向き、歩き始めた。

「…ん？前…」

康次は呟いた。

「…俺は今、どっちに進んでるんだ…!!？」

康次は立ち止まり、首を前後左右に振った。

「…俺は今、どこにいるんだ!？」

康次の顔から血の気が失せ、代わりに恐怖感が募り始めた。

ふいに、康次の頭上からせせら笑いが聞こえてきた。

「誰だ!？」

康次は頭上に向かって叫んだ。

だがその笑いは止まることなく、だんだんと大きくなっていき、康

次の頭の中から聞こえてきて、やがて高笑いへと変わっていった。

康次はその場に崩れ落ちた。耳を塞ぎ、首を激しく振り、呻いた。

「やめろ!! やめてくれ!! やめてくれえ!!!」

…声は止んだ。

だが代わりに天井が崩れ、いくつもの岩や石が、康次の頭上に降り注いだ……

「…遅い！！何やってんだ！？」

岩に座った洋介はまだ帰ってこない2つの班に苛立っていた。

「ホントだな…。かれこれ3時間はたつんじゃないか…」

竜が心配そうに言った。

諒子が口に丸めた手をあてた状態で、

「…ひよつとして、何かあったのかも…」

と言い、他の4人の顔を見た。

「探しに行くか…！！」

洋介はゆっくりと立ち上がり、右のほうを向いた……

康次たちの班が行った方角へと進んだ洋介たちは、目の前にある死体と瓦礫の山を見て、目を疑うしかなかった。

腐った死体が放つ異様で独特な匂いに、5人は顔を歪めた。

「……………ひでえ…」

強はゆっくりと山に向かって進んでいき、山の上に登っていった。

死体を踏ん付けて登っていく強の光景はそれこそ異様だった。

「…見ないほうがいいわ。」

諒子は茜を優しく抱き締めた。

強は瓦礫や死体を素手でどかし、掘り続けた。

「…なんかあると思ったが…なんもねえな…」

強は舌打ちし、ゆっくりと降りようとしたその時、

何かに足首を掴まれた。

「うわぁー!!」

強は足首を掴んだ手を振りほどき、その手を踏み付けた。

「コノヤロウー!! てめッ……!!」

強は何回もその手を踏み付け、やがて手がぐったりしてゆっくりと落ちた。

「なめやがつてー!!」

強は手に向かって言い放ち、足早に山から降りようとした。

その時だった。瓦礫の中から声がしたのだ。

「……その声は……つよ……しか……？」と。

強は驚いて振り向き、ぐったりした手がまだピクピク動くのを見て、その辺りを掘り返した。

強は見つけた。

衰弱しきった仲間の顔を。

強はもう虫の息の仲間を、必死に山から掘出した。

体はズタズタに切り裂かれ、肌の色は真っ青になってしまった変わり果てた康次だった……。

友の死

「強！？どうした！？」

洋介は山の上の強の異変に気が付き、声をかけた。

「…康次だ…」

「何？聞こえねーよ！！」

「康次だ！！！！」

強は語気強く言った。

「衰弱しきつてる！！冷てえ！！体温がねえ！！なんかあつたけえもの持ってこい！！」

康次は「…いいんだ」とだけ語気荒い強に言つて、「洋介を…」とだけ言つた。

「洋介！！」強は叫んだ。「話があるそうだ！！」

洋介は走つて駆け寄つた。

洋介は衰弱しきつた康次を見て、手を握り、「今、暖かくしてやる」と言つた。

だが康次は黙つて首を振ると、「…話を聞いてくれ…」とだけ言つた。

「…広一は…死んだ…。おそらく、孝志と和也も…」

康次はゆっくりと消え入りそうな声で喋りだした。

洋介と強はただ呆然と聞いていた。

「…みんな…すまないと思つて…いるん…だろう…な…」

康次は洋介に向かって手を伸ばした。洋介はしっかりと握り締める。

「…お、俺は…お…前に…嫉…妬…して…いた…。リー…ダー…として…は…情け…ないのに…もかわらず…みんな…な…に…慕わ…れ…た…お前…に…。…す…ま…なか…った…」

洋介は手に力を入れて、「馬鹿！！今そんなこというんじゃないよ

「！！」と言つていつそう強く握り締めた。目には自然と涙が溢れていた。

それを見た康次も目に涙を浮かべた。

そして最後の力を振り絞つて、

「俺は……俺は………」

と唇を動かしたが、「俺は」の後に何を言つたかは聞き取れず、康次はゆっくりと目を閉じた…。

洋介は体を震わせた。

強は近くにあつた瓦礫を悔しさで蹴つた。

「あつたかいものできたよお！！」

山の下で叫んだ諒子の声が切なかつた……。

【残り8人】

発狂

同じ頃、謙治たちの班は洋介たちとは逆の方向へひたすら歩いていった。

「謙治！！そろそろ戻ろうぜ！！かれこれ5時間はたつんじゃないか？」

和義は謙治の背中に向かって叫んだが、謙治はまったく振り返るそぶりも見せずただ前進している。

そんな謙治の後ろを絵里が黙ってついて歩いている。

和義は走って謙治の前に回り込んだ。

「おい！！聞いてんのかよ！？洋介たち心配してつかもしねえじやねえか！！はやく戻ろうぜ！！」

和義は謙治に向かって叫んだが、謙治は顔色一つ変えずに和義の横を通り過ぎた。そしてゆっくりと口を開いた。

「戻りたいならお前1人で戻ればいい。俺は1人で蘇る。」

謙治は前進し続けた。和義は銃を取出しながら振り返り向き、謙治の背中に向けた。

「止まれ！！」

謙治は冷たい目をしてゆっくりと振り返った。

「お前、いったい何を考えているんだ？」

和義は謙治に問い掛けた。

謙治は薄く笑みを浮かべ、何回か頷くようなそぶりを見せた。

「…シネ」

謙治は冷たく言い放つと和義の後ろから銃声が鳴った。

和義は背中から血を吹きだして倒れた。和義は苦痛に顔を歪ませながら、ゆっくりと後ろを振り向いた。

拳銃を握り締めながら、肩で息をしている絵里が立っていた。

「…絵里……お前…」

和義は歯を食い縛り、絵里を睨んだ。

絵里はたじろぎ銃を放り投げ、丸くなってしゃがみこんだ。体がガタガタと震えていた。

「…ごめんなさい、和義…許して…」

絵里は涙声で何度も言い続けた。

その絵里の様子を見て、和義は口をわなわなと震わせた。

「…こんな男の…どこがいいんだ…」

絵里は目を見開き、和義を見た。和義もキツと睨み付けるように絵里を見ていた。

その時、二人の視線が合わさったその刹那、銃声が鳴り絵里の胸から血が吹き出した。

和義は驚いて目を見開き、首を素早く戻して謙治を睨み付けた。

謙治は銃を指で回転させながら、不敵な笑みを作って和義を見下していた。

「…貴様！！自分を愛してくれる人を…自分を守ってくれた人を…裏切ってまで…何がしたいんだ！？」

謙治は回していた指を止め、銃口を和義に向けた。

「大虐殺。」

謙治は笑った。声高く…。

「生前は、殺し足りなかったからなあ！！…ちようどいい、貴様も殺してやるよ…。永遠に闇を彷徨えばいい…」

和義はさっきより一層鋭く謙治を睨み付けた。

「き…さま……！！！」

謙治が放った弾は和義の後頭部を直撃し、和義はその場で絶命した。

謙治は狂ったような叫び声をあげ、手を広げ、天を仰いだ。

舌を出し、笑い続けた。

絵里が跪いて、ゆっくりと起き上がった。

謙治は顔を天に向けたまま、目だけ下に動かし、絵里を睨み付けた。

「…謙治…謙治…」

絵里は訴えかけるかのように、謙治の名前を繰り返した。

しかしそれは発狂した謙治にとっては耳障りなものにすぎなかった。

謙治の顔が無表情になると、銃口を絵里に向けた。

銃声と同時に絵里の頭から血が吹き出し、絵里はその場に倒れた。

しかし謙治は、絶命した絵里に対し、さらに5発撃ち続けた。

それから謙治は、動かなくなった絵里へゆっくりと歩み寄り、頭を踏み付け微笑み、狂ったように何かを天に向かって叫び続けた……。

安らぎ

洋介たちは康次やたくさんの死体を火葬し、もとの場所に謙治たちの班が戻ってないことを確認すると、謙治たちがいった方向へと歩きだした。

途中、安全そうな洞穴で一休みすることにした。

死体からはぎ取った燃えそうな布や衣服を使い火をつけ、5人でそのまわりを囲んだ。洞穴の壁に5人の影が映し出された。

「眠くなってきたな…」

強がポツリと言った。

「そうだな、ここらへんで一休みしてもいいんじゃないか、洋介？ 茜も疲れてるだろうしな」

すでに火を背にし、横に体を伸ばし右手を枕にして頬杖をついている竜が尋ねた。

強はすでにいびきをかいている。

洋介はプツと吹き出し、「そうだな、休もう」と言った。

「諒子は寝ないのか？」

3人とも寝静まり、まだ起きている諒子に洋介は尋ねた。

「ええ、洋介こそ寝ないで大丈夫なの？」

諒子は洋介の顔をじつと見つめた。

「俺はまだ大丈夫。」

洋介は笑顔で答え、「となりいい？」と諒子に尋ねた。

「いいよ。」諒子の答えはすぐに返ってきた。

洋介はゆっくりと腰を落とし、手のひらを火にかざした。

「とんでもない試練だな…康次たちが死ぬなんて…」

洋介は火を見つめながらつぶやいた。

「…そうね。なんだか悔しいわね…。」

諒子も火を見つめながら答える。

しばらくの沈黙のあと、洋介がゆつくりと口を開いた。

「俺さ、蘇ったら人のためになる人生を生きたいって言ったじゃん。」

「

「うん。」

「もう一つあるんだけど…」

「何？」

「…諒子と共に生きていきたい」

諒子は目を見開き、洋介の方をむいた。洋介はじつと諒子を見つめていた。

「…駄目…かな？」

洋介は顔を少し下に落とした。

諒子は微笑み、「いいよ。」と言って、洋介に抱きついた。

「待ってたんだぞ、その言葉あ」

諒子は目に涙を浮かべにつこりと笑った。洋介もやさしく抱き締めた。

「好きだ、諒子」

諒子の頬を涙がつたつた。

「…私もよ」

二人は抱き合いながら、ゆつくりと目を閉じた。

暖かい炎が二人の影を優しく照らし続けていた……

【残り6人】

狂気

謙治は歩き続けた。

足はふらつき、目は焦点定まらず、口からはよだれをだらだらと垂らしながら…

急に目の前に何かを見つけた。

謙治は何やらわけのわからないことを叫びながら、それに向かって走りだした。

1人乗りの機械だった。

丸い球体を4本の足が支えている。外面は鋼よりも堅い金属で覆われ、球体の中の操縦室にはたくさんのボタンがあった。

謙治はシートに座り、1つスイッチを押してみた。

すると、ドンッ！と大きな音がしたかと思うと、目の前の地面に大きな穴を開けた。

ミサイルのようなものが発射されたのだ。

そう、これは殺戮兵器だった。

謙治はその場で座ったまま飛び跳ねた。

子供のように笑いはしゃぐと、今度は別のボタンを押してみる。

無数の銃弾が乱れ出る。マシンガンだった。

そしてまた謙治は飛び跳ねた。

「……ヒヒッ！」

謙治はさまざまなボタンを押し、そのつどシートの上で飛び跳ねた。まるで子供がつぎつぎと自分が欲しかったものが手に入った時に無邪気に喜ぶように…。

謙治はまたあるボタンを押すと、今度は宙に浮き上がった。

謙治の目は怪しい光を放った。

謙治は元きた道を戻り、途中にある和義と絵里の死体に空中から爆

弾を数個落とした。

地面に落ちて爆発し、煙が晴れると2人の死体はどこにもなかった。

「ヒヤハアアア!!」

謙治は手を叩き喜んだ。

謙治は進路をさらに元きた方向へと向けた。

その時、謙治の頭にある神殿が浮かび、謙治の脳を刺激した。

謙治は進行方向の向きを変え、そのまま飛んでいった。

洋介たちは目覚め、ゆっくりと荷物の整理をし始めた。

強が何やら火薬のようなものをもってるのに気が付き、洋介は「何だそれ？」と尋ねた。

「炸裂弾だ。瓦礫の山で見つけたんだ。しけちやいねえし、まだ使える。」

強は強く炸裂弾を握り締め、洋介に振り返り笑ってみせた。

洞穴から出た4人は「あつ!!」と叫んだ。

目の前に丸い球体を足がそれを支えている1台の機械が立っていた。その中から懐かしい声がした。

「よお、みんな!!」

謙治だった。謙治はゆっくりと操縦席より出てきて、ドアを閉め、機械にもたれかかっていた。

「すまねえな…。和義も絵里も死んだ。」

洋介たちは呆然とした。

「だがみんな、蘇りの目的の最終地点ならわかったよ。最初の神殿だ。」

洋介たちは互いに顔をのぞき合って、それから洋介は謙治に「どういうことだ？」と尋ねた。

謙治の口元がゆっくりと緩み、笑った。

「とにかく早く来てくれ！！俺は先にいく。」

そういうと足早に機械の中へと乗り込み、宙に浮き、神殿の方向へと飛んでいった。

「とにかく…俺らも行こう！！」

洋介は皆に指図すると、神殿の方向に進路を変え、ゆっくりと歩き出した。

しばらくして、洋介たちも神殿前に到着した。

謙治はもう何時間も待っていたかのように機械に乗って立っていた。

「謙治！！来たぞ！！いったいどういうことなんだ！！？」

洋介は大声で叫び尋ねた。

だが、謙治はもうすでに普段の謙治ではなかった。

目は焦点定まらず、口からはよだれを垂らしながら意味のわからないことを叫んでる発狂した謙治だった。

洋介の問い掛けに対し返ってきたもの…。

それは問いの答えではなく、マシンガンの弾の嵐だった…。

犠牲

「危ない!!」

洋介たちはすんでのところで避け切った。

「て…めえ!! 謙治!! 頭イカれやがったか!？」

強が謙治を睨みつけ叫んだ。

謙治は首だけを強のほうに向け、吠え狂った。

「……………イカれてやがる」

強は飛んでくるマシンガンの弾から走って回避した。

謙治は強をマシンガンの銃撃で追い回した。

そんな強を助けようと、洋介たちも謙治に罵声を浴びせた。

謙治はまたもや首だけを洋介たちに向け、吠え狂い、マシンガンを発射させる。

強が隠し持っていた銃で機械目がけて引き金を引いた。

キンツと音をたててむなく弾はその鋼より堅いボディにはじかれる。

「…マジかよ」

強は啞然として、銃を遠くへ放り投げた。

「くその役にも立たねえじゃねえか!!」

強は悔しがって岩を蹴ると、機械は強のほうを振り替える。

「いつ!?! やつべ…!!」

強はとつさに岩に隠れ、マシンガンの銃撃を避けた。

ふと、自分のポケットに何かが当たった。炸裂弾だった。

「…そうか…これなら…」

強は一瞬の隙について、岩影から出てそのまま走って逃げる。

「洋介!! 洋介、どこだ!？」

強は叫んだ。洋介は走ってくる強を見つけ、手を振った。

「ここだ!!」

「おお!! 洋介!! いい作戦を思いついたんだ!!」

必死に逃げる強の後ろに機械が見えた。

「おい！！こつちくんな！！」

洋介たちもたまらず逃げる。

「ちよ、待てよ！！おい！！」

強は後ろを振り返った。機械がその4本の足で必死についてくるのが見える。

「あいにくだが、走りなら俺たちのほうが速いな」

強は得意そうに笑い、そしてまた考えた。

「…ひよつとすると、アイツ走りながらじゃ銃は撃てないってわけか…」

うーんと頭を掻きながら、もう一度振り向くと、機械は止まっていた。

「へへっ！！疲れちゃったかな」

強は立ち止まり、笑った。

が、その目はみるみる凍り付いた。

「なんだ！？なんかくる！！」

強の目に映ったバチバチと音をたてるそのフラフープの輪に似たようなものは、ゆっくりと左右に揺れながら迫ってきた。

「おっと！！」

強はすんでのところで避けた。

が、強はハツとした。

強は仲間たちに叫んだ。が、聞こえてきたのは何人かの苦痛の叫びだった……。

強は目を大きく見開いた。

洋介、茜、竜の3人があの円の中でもがいていた。

そのそばでかるうじて助かった諒子が倒れている。

しばらくしてバチバチと音を出していたその稲妻のような光が消え、

洋介たち3人はその中で跪いた。

「大丈夫か!？」

強が走って駆け寄ると、何も無いはずなのに何かに弾かれ、突き飛ばされた。

「見えない壁でもあんのか？」

強は頭を押さえながらゆっくりと立ち上がり、諒子の元に駆け寄った。

洋介は意識朦朧だったが、倒れてる諒子を目の端で捕らえ手を伸ばした。

が、諒子に触れそうになった時、手に激痛がはしった。

「ぐあつ!!」

洋介は思わず手を引つ込めた。「何だ?これは!!」

「電磁波さ…」

驚いて洋介と強は声のしたほうを向くと、機械が立っていた。

「俺は逃げ回るねずみは嫌いだね…そのほうが楽に死ねていいだろう?」

謙治はニタリと笑った。

ゆっくりと諒子が起き上がった。ついで、竜が茜が意識を取り戻す。

「よしよし…気を失ったまま死んでもらっちゃ痛くも痒くもないからな…苦しんで死んでもらわなきゃ…」

謙治の瞳が危険な感じにすぼまる。

「…シネ」

強はゆっくりと立ち上がった。手には炸裂弾が握り締められていた。

「諒子…お前、サポートしてくれ」

諒子は強のほうを向いた。諒子はこっちを見つめている強の目に何かを覚悟した炎が燃えているのが見えた。

手に握り締められた炸裂弾を見て諒子はすべてを察した。

「ガキは2人でいい。もしまた出会えたら、そんな時、見せてくれ」

強は諒子に微笑んだ。諒子は涙を浮かべ頷いた。

「洋介を頼むな…」

強はゆつくりと謙治に向かって歩み寄った。

「…何ダ…キサマ？」

強はゆつくりと右手を上げた。

「この世界の炸裂弾だ。」

強は叫び、謙治に突進した。謙治も叫び、強にマシンガンを発射した。

強は頭を撃たれ、心臓を撃たれても堪え、決して倒れなかった。

止むことのない弾の嵐の中で強は謙治を睨みつけ笑った。そのすさまじい形相に謙治は怯んだ。その隙を見逃さなかった。

振り上げられた右手が機械の頭上に当たったその刹那…。

強は洋介をチラッと見て笑い、高らかに叫んだ。

「さらばだ！！洋介！！」

その瞬間、すさまじい爆発が強と機械を包み込んだ……。

断罪

「強いいい！！！！」

洋介は絶叫した。

諒子は銃を片手に爆煙の中へと走っていった。

「…ち、ちくしょう…！！俺たちは…何もできなかった…！！見てることしか…クソッ！！」

洋介は見えない壁を思い切り叩いた。手に激痛がはしったが、悔しさのほうに勝って、何も感じなかった。

竜はその場に座り込み、何度も地面を叩いた。

茜は涙が頬を自然と伝った。

しばらくして煙が晴れると、諒子がいづくばって逃げようとしている謙治の後頭部に銃口を押しつけていた。

謙治はゆっくりと首だけを後ろに向け、諒子に向かって口を歪めた。笑ったのだ。

その侮蔑としか読み取れない顔は諒子の目を冷たくさせた。

なんの感情も持たない人形のように、無表情で諒子は静かに引き金を引いた。

銃声が鳴り響き、謙治はその場で絶命した。

諒子は銃を静かに落とした。

そして爆発した機械の残骸を調べ始めた。3人の電磁波を解除するための装置があるかと思つての行動だった。

「…無駄だよ…」

諒子の後ろから声がして、諒子は背筋が凍り付いた。

ゆっくりと振り向くと、殺したはずの謙治が立っていた。

目を見開き、口から血を流し、ふらふらと立っていた。風が吹けば飛ばされてしまっただろう。

だが、その瞳には生きている光さえも見えない。

諒子は首を傾げた。

「驚くのも無理はない…俺はこいつの脳を支配していた…楽しかったぜえ…3人も殺すことができたんだからな…」

諒子の目に怒りの炎が映った。

「さて…本題だが、あの3人の電磁波を解除するには神殿のまわりにもあの3人と同じ電磁波が囲んでる…あの神殿の電磁波が解ければ…あの3人も動くことができるぜえ…」

諒子は神殿のほうを見つめた。

謙治の目が怪しく瞬く。

「だがな…あの電磁波を解くには誰か1人の命捧げなきゃならねえんだよ…」

諒子はハッとして、ゆっくりと謙治を見つめた。

「てめえらが…みんな全員で蘇ろつたなんて…所詮無理だったんだよ…！」

謙治は高らかと笑った。

諒子はそばに落とした銃を拾った。

「無理だったんだよ！！無理だったんだよ！！無…」

諒子は撃った。何の感情ももたずに…。

諒子はもう一度神殿を見つめ、静かに悲しい瞳を伏せた。

自分の今の状況が…運命が見えたような気がした……。

妻

「…聞こえたか？」

3人はさっきの謙治の発言に動揺した。

「誰か1人の命を捧げなきゃ、蘇れねえのか…？」

洋介はハツとして諒子を見つめた。

諒子は目の前にそびえ立つ神殿を見つめていたが、やがてゆっくりと立ち上がり、神殿のほうへと歩きだした。

「…まさか、あいつ…！」

洋介は「諒子…！」と叫んだ。「何する気だ…？」

「何する気…？…」

諒子は洋介を振り返った。目には涙を溜め、口元は薄く微笑んでいた。

「こうしなきゃ、あなたたちそこから出られないのよ」

諒子の頬を涙が伝った。

「…ねえ、洋介…。私、洋介の幸せのために生きていきたいの…」
優しくささやくようなその口調は、洋介をハツとさせた。

「洋介…蘇ったら…」

諒子の目から大粒の涙がこぼれ落ちた。洋介は叫んだ。

「バカ野郎…！お前、死ぬんだぞ…！」

洋介は見えない壁に手をついた。

「今すぐそっちへ行つてやる…！待ってる…！」

洋介は壁を叩いた。衝撃など何の痛みもなかった。

諒子はそんな洋介を見て、微笑んだ。涙がポタポタと溢れだした。

「洋介…」

洋介は俯いていた顔を上げた。涙でくしゃくしゃになっていた。

「ここに2人で築いた家庭があります…」

諒子は涙を流しながら、ゆっくりと後進する。

「私は今、玄関で靴を履いて、遠い旅に出ようとしています…」

諒子の足がピタリと止まる。境界だった。

「それ以上行くな！！諒子お！！」

洋介は涙声で叫んだ。諒子はニコリと笑い、

「今から行く場所はあなたには絶対来てもらいたくないの…」

涙が諒子の頬を二筋流れた。

「今、そっちへ行く！！待ってる！！」

洋介は壁を何度も何度も殴った、叩いた…。そんな洋介の姿を見て諒子の瞳から涙が大量に溢れだした。

「…洋介…」

諒子は涙で消え入りそうな声で言った。

「…ずっと…一緒に…いたかった…！！」

洋介は顔を壁に押しつけた。切なくて歯痒くて、涙が幾筋も流れた。

「…私は…玄関のドアを開け…」

諒子は左足をゆっくりと境界の中に入れた。ジジッという音がして消えてなくなる。

「ああ…ああ………」

洋介は歯を食い縛り、涙でぼやけるが、消えていく諒子を見つめた。
「…行つてきます…！！」

そう言つて優しく微笑んだ諒子の顔が境界の中に消えていき、すぐに大爆発が起こった。

電磁波は消え、そのまま洋介は雪崩落ちた。

洋介は天を仰ぎ叫んだ。

「諒子おおお！！！！」

悲痛の叫びは大地に悲しくこだました……。

【残り3人】

神殿内部

洋介は跪いたまま動くことができなかった。

竜はしばらく何も声をかけなかったが、しばらくして「行くぞ」と言った。

洋介はまったく動かなかった。涙が止まらなかった。諒子との今まで
での思い出がつぎつぎに浮かんできた。

そんな洋介を竜が胸ぐらをつかんで無理矢理立たせて叱咤した。

「何のために諒子が犠牲になったかわかってんのか!？」

洋介は竜を涙目で見つめた。

「お前は諒子のためにも蘇らなきゃならねえんだよ!!」

竜の言葉を聞き、洋介は目を閉じ、そして服の袖で涙を拭き、「
行くぞ!!」と言つて神殿へと乗り込んでいった。

神殿の中は薄暗かった。

だが、来たときに比べると何かが違う。

邪悪な闇に包み込まれているような雰囲気の中で、3人は音を殺して進んでいった。

しばらくすると見覚えのある部屋に出た。

すべてはここで12人で始まったが、今ここにいるのは3人だけである。

そう思いながら洋介はゆっくりと前に歩いていった。

その時、何か音が聞こえた。

「何だ？」洋介はそう思うとハッとして後ろを振り返った。

2人がいなかった。

「な!？」

洋介は戻ろうとして1歩踏み出したその時、床に大きな穴が空き、

下へと落ちていった。

洋介はゆっくりと目覚めた。

どれくらいの時間気絶していたのだろうか…。

そこは不気味な闇で、ところどころ青白い光が走っている。

「竜うう！！茜ええ！！」

洋介は叫んだが、それは闇の彼方に不気味にこだまし、消えていった。

「チツ…」

洋介は舌打ち一つするとゆっくりと歩きだした。

洋介は壁に手をかけ、ゆっくりと前進した。

その壁は生暖かく、柔らかく、まるで生きているかのようで、膨らんでいる部分や平らな部分など様々な形だった。

「なんだよ、この壁は…」

洋介が闇の中壁を覗こうとしても何も見えず、洋介は先に落ちたであろう2人の名前を叫ぶしかなかった。

ふいに洋介はバランスを崩した。壁に穴が開いていて、その中に手を入れてしまったのだった。しかしその穴には上下にごつごつとした堅いものがあり、奥に伸ばそうとしたが届かなかった。

「なんなんだよ…。」

洋介はそれでも手は離すまいとして壁伝いに歩いた。

不気味な青白いライトが怪しく動く。

闇を明るく照らしたすものではないが、少し明かりがあることは洋介にとってはありがたかった。

その青白いライトが洋介のすぐ前を通過して、反対方向の壁を照ら

す。

青白いライトが反対側の壁を照らすのを見た時、洋介はゾツとした。洋介は今自分が何に触れているのかわかった。

……人間の顔……？

洋介は先程の穴を思い出した。

上下についた堅いものが歯だとしたら……

そして今までの手首に残る感触を思い出した。

でっばっていたのが鼻……

平らな部分がでこ……

指が吸い込まれそうになったのが閉じた唇……

洋介は手を壁から離れた。

洋介は震えた。青白い光が照らす壁はすべて人の顔で埋め尽くされていた。

「うわあああああ！！！！」

洋介は走った。走って走って走り続けた。

左右も見ず、目を瞑り、ただひたすら走り続けた。

そうして着いた場所……。

床に無造作に投げ捨てられたバズーカ砲に似た銃器。

光が反射し壁を映す。

大きな目が一つ、壁に不気味に埋め込まれている、ゾツとするような部屋だった……。

最終試練

「…ようこそ!!」

目から声が聞こえてきた。聞き覚えのある声。

「最初にここに来た時の声はあんたの声だったってわけか…」
洋介は目を睨み付けた。

「その通り。よくここまで来たな!! 最終試練だ!!」

「最終試練…?」

洋介は訝しそうに尋ねた。

「その通り…!!」

目は怪しく窄まりはじめた。

「お前の目の前に落ちてるバズーカ砲で私を撃てばよい。それが合図だ。」

洋介は怪訝そうな顔をした。嘘だ!! 畏だ!! そう心で思った。
しかし目は何もかもを見透かしてゐるらしく、細めた。

「ここに来る途中…お前はともひどく恐ろしい経験をしたようだな…」

洋介は目を見開いた。

「…あの顔は何だ? なぜあんなにも大量な…」

洋介はハツとした。

「まさか…死んでいった人の…」

「その通りだ。」

目は一層細まった。笑っているのだ。

「哀れな者どもの標本さ。」

洋介は怒り震えた。そしてしゃがみこみバズーカ砲を手に取ると、
わなわなと震えながら叫んだ。

「許せねえ……！！てめえだけは絶対に許せねえ……！！」

バズーカ砲の銃口を目に向けた。

目は黙って洋介を見つめていたが、瞳を左右にずらした。

竜と茜が洋介の隣に立っていた。

「……お前ら……」

竜は黙って洋介の左肩に手を乗せ頷いた。茜も右肩に手を乗せ黙って頷く。

洋介は薄く笑みを浮かべ、目に向き直した。

「いくぜ」

引き金を引き、弾は瞳のど真ん中に命中した。

「さすが、洋介」

竜はポンツと肩を一叩きした。

目は焼かれ、瞳を失っていたが、ゆっくりと声が聞こえてきた。

「最終試練の始まりだ……だ……だ……」

不気味にこだましたかと思うと、天井がグラグラしている。

「……おい」

3人は互いに顔を見合わせた。

「走るぞ……！！」

洋介は叫んだ。

「神殿が崩れる……！！」

親友

洋介たちは闇の中、必死に走った。

天井から降ってくる瓦礫や石を必死で避けながら。

「洋介！！こつちで大丈夫なんだろうな！！？」

「知らねえよ！！俺に聞くな！！！」

竜の問い掛けに対し、洋介は語気強く言い放った。

「知らねえって……オイオイ」

竜は嘲り笑いをすると、後ろを振り返った。

「茜！！大丈夫か！？？」

茜は息を切らして懸命についてきている。

「うん！！大丈夫！！！」

茜は竜に向かって微笑んだ。

しばらくして光が見えた。

出てみるとそこは崖だった。しかし、向こう岸に渡るための岩できたような橋が架かっていた。

崖の下には溶岩のような真っ赤なドロドロとした得体の知れないものが流れている。

3人は走って駆け抜けようとしたが、茜が途中で転んでしまった。

「茜！！！」

2人は茜のもとに駆け寄り、竜が抱き起こした。

そして、洋介に渡したその刹那……

竜と洋介の目の前で、刀の斬撃に似た衝撃が走り、竜の腕が切り裂かれ、鮮やかな血が吹き出した。

そして、ちょうど竜と洋介の間に亀裂が走り、橋が真っ二つになり、だんだんと竜が遠ざかる。

「竜！！！！」

洋介は抱き抱えた茜をおろし、「手を伸ばせ!!」と言った自分にハッとした。

竜の腕は自分の元にあるのだ。洋介は床に落ちた竜の両手を見つめた。

「行け」

竜は立ち上がり、唇を薄く笑わせた。

竜の側の橋はだんだんと沈んでいく。

「竜!!」

まだ自分の名前を叫んでる洋介に向かって竜は叫んだ。

「諒子の死を忘れるんじゃないぞ!!」

洋介はハッとして、唇を噛み締め頷き、振り替えると走りだした。茜が振り返り、

「竜さん!!ありがとうございます!!」

と言うと竜は優しく微笑み、「洋ちゃん!!」と叫んだ。

洋介はピタリと止まって振り向いた。

子供の頃に竜に呼ばれていた懐かしいあだ名を呼ばれて、涙が流れた。

竜は手のない腕を高々と上げて、「またな!!」と言った。

洋介も高々と上げて、「ああ!!竜ちゃん!!」と答え、茜の手を引き走りだした。

涙が自然と溢れてきた。歯を食い縛り必死にそれを堪えようとした。

竜は2人が渡り終わるのを見送ると、その場に座り込んだ。

橋はゆっくりと沈んでいく…。

2人は階段を駆け上がり閉じられている扉を開くと、見覚えのある場所に出た。

最初に来た時と同じように、右側の壁が光り輝いている。

「行こう!!」

洋介は茜の手を握り締め、光の中へと駆け抜けていった。

Last Smile

光を突き抜けると、そこはまだ神殿の長通路だった。
茜の手を取り、洋介は走った。

崩れ落ちてくるものがだんだんと大きくなってくる。
洋介に様々なことが浮かんできた。

生前のこと…

この世界に初めて来た時のこと…

この神殿で誓い合ったこと…

康次の最期…

諒子と洞穴の中で交わした誓い…

狂った謙治の顔…

強の叫び…

諒子の涙…

不気味にこだました目の言葉…

竜の最期に見た顔…

すべてが洋介の脳裏をかすめ、洋介は手で涙を拭った。

そしてもう一方の手にしっかりと茜の小さな手が握られているか確認した。

茜が生前、自分に発砲された銃弾の前に現れ死んでいったあの姿が思い出された。

『この子には蘇ってもらいたい…！！たとえば、俺の命に変えても…！！』

洋介はそう強く思って、キッと前を向き直った。

しばらく走るとまた光が見える。

「…あれは？」

洋介は駆け抜けた。茜も続く。

すると先程までの場所とは違って、ここはもの静かだった。

天井が揺れる音さえしない。

洋介と茜はゆっくりと歩きだした。

しばらくすると、光り輝く円形の穴が見えた。

「これだー!!」

洋介は覗き込んだ。

「深いな…」

洋介は足をゆっくりと入れようとすると、天井が揺れ始めた。洋介はまったく気がつかない。

「とにかく入ろう!! さあ、茜!!」

洋介が手を伸ばしたその時…

「危ない!!」

茜は洋介を穴の中に突き飛ばした。

茜の下半身に天井から落ちてきた巨大な岩がのしかかり、茜は呻いた。

「茜？」

洋介は手を差し伸べた。

「危ないところだった!! ありがとう!! さあ、はやく乗れ!!」

茜は動こうとしたが、まったく動くことができなかった。

茜はそっと目を閉じて、目の前に出されて揺れる洋介の手を握り締め、優しく微笑んだ。

「茜？」

茜の体が消えていく。いや違う、消えていくのは洋介のほうだ。

円形の床はだんだんと下降していく。

洋介は涙を浮かべて叫んだ。

「お前はまた…俺のために犠牲になるのか…!!」

茜は優しく微笑み続けた。茜の頬を涙が伝い、そっと落ち、それが洋介の頬に優しく当たった。

洋介は遠ざかる茜の顔をいつまでも見つめていた。
そしてだんだんと音も何もかも聞こえなくなり、目の前も霞んでい
き、やがて闇に変わっていった……。

【蘇生1名】

嘘つき

「山口警視を連れて参りました。」

「入りたまえ。」

会議室の扉が開き大介が入っていくと、熱いお茶が入った湯呑みが勢い良く飛ん

できて大介の額に直撃した。

「佐藤警視長、鎮めてください。」

佐藤の隣に座っていた若い男が宥める。

大介は血が吹き出しても、熱湯のあまりの熱さにも、堪えて目の前を直視した。

「何で呼ばれたか、わかってるな？」

大介はゆつくりと頷いた。「……………はい」

大介は目を伏せた。佐藤が立ち大介に向かって歩いてくる。

「何で嘘などついた？」

佐藤は大介を殴り倒した。

「ええ！？日本中の皆様になんて説明すればいいんだよ！？」

大勢の警察官が「佐藤警視長！！」と叫び、必死に宥めようとする。

大介は黙ったまま、俯いていた。

「貴様……！！黒沢洋介は死んだと言ったな。私の目の前で自爆した

……と。」

「……はい。」大介は俯いたまま答えた。

「それでは今、留置場で留置しているあの男は誰なんだ！？記憶はすべてなくして

しまっているが紛れもなく黒沢洋介本人ではないか！！」

佐藤の足が大介の顎に食い込んだ。大介はそのまま倒れ一瞬意識が飛んだが、ゆ

っくりとまた立ち上がり佐藤に向かって頭を下げた。

「彼に会わせてください……！！話をさせてください！！」

佐藤は大介を睨み付け、「何を企むつもりなんだ？」と低い声で言った。

「数万人もの人を殺した大量殺人鬼を逃がした理由は何か企んでいるつもりなんだろう！？」

佐藤の声がまた語気荒くなった。

「ああ！！国民の皆様になんてお詫び申し上げればいいんだ！！警察官が死んだと嘘

の報告をしてまで殺人犯を逃がすとは、警察始まって以来の重大事件だ！！」

佐藤は長机を蹴った。机は倒れ湯呑みの割れる音が嵐のように鳴り響く。

「彼に会わせてください……！！」

大介はなおも佐藤に頭を下げ、繰り返した。

「彼に会わせてください……！！会わせてください……！！」

面会を許された大介は、マジックミラー越しに見た一人の男を見て、驚いた。

洋介が生きているということをいまひとつ信じていなかった大介だったが、自分の目の前にいるこの男は紛れもなく黒沢洋介だったのである。

部屋のドアを開け、大介は椅子に座り洋介と向かい合った。

「……洋介……お前、何で……？」

洋介は顔をゆつくりと上げ、大介をじっと見つめた。すると洋介の死んだ魚のよ

うな目が、だんだんと瞳に生気が宿り、大きくなる。

同時に洋介の脳内では爆発が起こっていた。

「……刑事……」

大介は急に立ち上がった。「お前…何で生きているんだ!？」

洋介はゆっくりと俯いた。

「…生きている…? なぜだろう…? 俺は確かに自爆したはず…」

すると、洋介の内部に様々な人間のシルエットが浮かんでは消え、
浮かんでは消

えた。

洋介は頭を抱え、呻いた。

「まだ、足りない…何か足りない…」

大介は洋介のこの様子を見て、尋ねた。

「…お前、記憶を全部なくしていたらしいな…?」

「ああ…」

答えはすぐに返ってきた。

「…しかし、俺に出会ったら…俺と関係のある記憶だけが戻ったと
いうのか…?」

「

洋介はゆっくりと頭を揺らし答えた。

「…ああ」

大介は何か思い当たったように前を向いた。

「…それならば!」

大介は頭を抱え俯いている洋介に囁いた。

「待つてろ…お前の記憶が取り戻せるかもしれない…!!」

記憶

洋介は太介から1冊の厚いノートを渡された。ブラック・イレブンの調査ノートだった。

洋介は壁に寄り掛かり、ゆっくりと開いた。仲間の顔を見るたびに自分の脳に爆発が起こる。

康次、諒子、竜、強、謙治、孝志、絵里、広一、和義、和也……ページをめくるたびに洋介の脳内に仲間とのすべての記憶が蘇る。生前のことだけではない。あの世界でのことも蘇ってくる。

洋介はノートを読み終えゆっくりと閉じた。上を見上げ溜め息まじりに呟く。

「俺は……蘇ったのか……」

次の日、太介にこのことを伝えた。

「にわかには信じられない話ではあるが……」

太介はゆっくりと顔を手で覆った。

「信じよう……!!お前は確かにあの日死んだ。だが今、こうして俺の前に現れた。」

蘇ったということ……!!」

洋介はゆっくりと太介を見つめた。

「だが……まだ俺の記憶に影がある。1人の少女のような気がするんだが、俺のほうをずっと見つめている……。」

太介は目を細めた。

「それは……松崎茜さんのことか？」

洋介は目を見開いた。

「茜……茜……!!」

洋介は立ち上がり、机に手をつき、身を乗り出した。

「茜の顔は！？」

大介は目を瞑り、ゆっくりと首を振った。

「…今はない。署にはあるが、俺には監視がついている。滅多な行動はとれん。」

「

洋介はゆっくりと座り、「そうか…」と一言だけ言った。

大介は洋介の顔をじっと見ていたが、ゆっくりと口を開いた。

「俺に話してくれないか？その蘇りの試練というものを…」

洋介は大介の顔を見、机に肘をついた。

「信じられるか？」

大介は口元で薄く笑みを浮かべた。

「ああ！！」

大介は洋介の話を聞き入った。その現実離れた話にある時は頷き、ある時は驚

き、ある時は目に涙を浮かべた。

洋介が話終わった後、ゆっくりと口を開いた。

「…つまり、お前は殺してきた罪を償うため、今度は世界中の人々のためになる

人生を送りたい、だから、蘇りの試練を受けたという訳か…」

大介は腕を組み、斜め上を見上げた。

「そのために…そのお前の夢のために…仲間全員は命を落としたというのか…」

大介は目を瞑り、二、三度頷いた。急に声をひそめた。

「最後まで戦おう。お前には遺伝子に変化が起こってるかもしれない。お前が黒

沢洋介でないなら死刑を免れることができる。」

大介は席を立った。

「仲間の死を無駄にするな…。」
ゆつくりと部屋から出ていった。

それから、洋介は何日も何日も自分の心に問い掛けた。
正しいこと、やるべきこと、信じるべきこと…

問い掛けるたびに、仲間たちの顔が浮かんでくる。

洋介に向かって微笑んでいる。

ゆつくりと洋介は目を閉じる。

仲間の顔が遠ざかって消え、光になる…。

洋介は薄らと微笑み、ゆつくりと目を開ける。

仲間たちがいなくなった心のキャンパスを見つめる。

その目には覚悟を決めた光が宿り、やがて、消えていく…。

ついに、洋介の初公判の日がやってきた。

洋介は証言台に立つと、目の前を直視した。

様々な人の声が耳元を擦る。だが、洋介の頭には届いていない。洋

介は黙って目

の前を見つめていた。

…いや、違う。

洋介は心の中を見つめているのだ。

仲間達が微笑み、遠ざかって消えていくあの幻を…。

「被告人！！！」

裁判長の呼び掛けでふと我にかえる。

「質問に答えなさい。」

洋介はゆっくりと目を上に向け、裁判長の顔を見つめる。

「DNA鑑定の結果、黒沢洋介と一致しています。」

どこからともなくまた誰かの声が聞こえる。また耳を擦る。

「被告人!!!」

再び裁判長が声を荒げて呼び掛ける。

「あなたは黒沢洋介ですね?…ですね?…すね?」

左から聞こえてくる声が何度もコダマする。耳に届くが、頭には届かない。洋介

はまた心の中の幻を見つめる。10人の仲間、そして1つの影……。

「ふざけないで!!!」

傍聴席から1人の中年の女が立ち上がり叫んだ。両手にはなにやら写真を持っている。

「遺影…か…。」

「静粛に。」

裁判長は女を諭した。だが女は続けて叫んだ。

「茜を殺したのはあんたでしょ!?!」

洋介はゆっくりと傍聴席の立ち上がってる女の抱えている遺影を見た。

優しい笑顔をした少女が写っている。

洋介は目を見開いた。洋介の脳内に爆発が起こり記憶が戻る。

洋介は口元で薄く笑い、ゆっくりと裁判長に向き直った。

「私が黒沢洋介です…。」

洋介は一言、はっきりと言った。裁判所中にざわめきが起こる。

傍聴席で大介は思わず立ち上がった。「…なぜだ…」大介は小さく呟く。

続けて洋介は言った。

「…松崎茜さんを殺したのは私です。」

裁判所中のざわめきがより大きくなる。

「この人殺し！！」

女は叫んだ。「茜を返して！！」

「静粛に！！！」

裁判長が必死に鎮めようとする。

しかし、この一言に驚いたのは大介だった。

「待ってください！！！」

大介は思わず声をあげた。

「松崎茜さんを殺したのは私です。」

大介のこの一言にざわめきが最高潮に達した。

洋介はゆっくりと後ろを振り向く。大介の瞳と交錯する。

「…私が撃ち殺してしまいました。申し訳ございません。」

大介は頭を下げた。

洋介は目を細めた。そして再び裁判長を振り返り、意志の籠もった声で言った。

「松崎茜さんを殺したのは私です…。」

大介は目を見開き、バツと顔を上げて叫んだ。

「洋介！！お前は真実だけを話せばいい！！松崎茜さんを殺したのは私ではないか！！」

「

洋介は何も言わず、目の前を見据えた。

「静粛に。」

裁判長は大介を諭す。…が、大介は洋介の背中に叫び続けた。

「俺の罪をお前が被る必要はない！！松崎茜さんは俺の銃撃で…」

「静粛に！！！」

裁判長は声を荒げる。だが、大介には聞こえなかった。

「俺の放った弾が、あの子に当たったんだ！！それなのに、なぜ、お前が罪を被る

んだ！！！」

裁判長は2人の警備員に目配せした。警備員は大介の左右に立ち、

大介の腕を掴んだ。

「退廷！！」

裁判長は冷たく言い放った。大介はなおも洋介の背中に向かって叫び続けた。

「俺の罪まで被って、自分1人の命で済まそうだなんて…そんなの俺が許さんぞ！！」

洋介！！洋介えええ！！！！」

大介が後ろのドアから警備員に連れられ出ていった。

洋介は何の感情も持たない目で、ジッと前を見据えていた。

「…見苦しい…！！」

同じく傍聴席にいた佐藤警視長が吐き捨てた。

「もはや、警察の恥だな…！！」

佐藤は大介が出ていったドアを睨み付けて罵った。

「…あの男…精神鑑定が必要なのでは…？」

佐藤の隣に座っていた男が耳元で囁く。

「…ふん」

佐藤は馬鹿らしげに鼻で笑った。

終幕

… 大介は精神鑑定の結果、異常であることがわかり、自宅で監視付きの療養になった。

… 洋介は何回かの裁判の後、死刑が言い渡された。

… 控訴はせず、洋介の死刑は確定した。

… そんな2人が再び出会ったのは、初公判から4年が過ぎた10月のある日だった。

大介は面会室の椅子にゆっくりと腰を掛けた。
ガラス越しに洋介が座るであろう椅子がある。
大介は目を瞑り、今までのことを振り返った。
ブラック・イレブンとの死闘から今までの長い期間を…

しばらくして、ドアが開いた。
真っ白い囚人服に身を包んだ、髭の生えた、痩せこけた洋介が入ってきて、ゆっ

くりと大介の目の前に座った。

「…久しぶりだな…刑事…」

洋介は力弱い声でゆっくりと喋った。

「…止める。もう今は刑事ではない…。警察手帳は捨てたのだ…。」

大介は懐かしそうに微笑んだ。

洋介は少し驚いた顔をしたが、薄く微笑んだ。

「勿体ないな…あんたみたいな刑事は、もう出てこないぞ…」

大介は何回か頷き、

「宿敵のお前に言われるのは…最大の賛辞だな…。」

と親しみを持って喋ったが、やがて目に涙を浮かべた。

「…なんで…松崎茜さんのことを庇った…？」

洋介は眉毛をピクリと動かし、大介を見つめた。

「誰かの役になりたかった…のかな…。」

洋介は俯いて薄笑いをした。

「俺の罪だ…殺したのは俺ではないか…罪を償わなければならない身のまま生き

ると言うのか…？」

大介は洋介に問い掛けた。洋介は口元を歪ませた。

「…そうだ…。」

大介は目を見開いた。洋介は続ける。

「人の死は死で償うのが妥当だとは思わない…。同じように、罪を人が用意した

刑で償うのが妥当だとも思わない…。」

大介の頬を一筋の涙が伝った。

「自分が背負った罪は…苦しみながらそれを償う答えを探し、一生を払って完遂

すること…。一生背負わねばならないものだ…。」

洋介の目にも涙が光った。

大介は悔しさでいっぱいになり、台に拳を握って叩きつけた。

「…もし、お前が俺の隣で蘇ってくれなら…すぐさま記憶が取り戻せたら…世界

に逃がして…夢を叶えさせることもできたらうに…!!」

大介は何度も悔しそうに叩きつけた。

「…もういいんだ…」

大介のそんな姿を見た洋介の目からも涙が落ちる。

「…無念だ…無念だ…!!」

大介の目から涙が、滝のように流れ落ちた……。

あれから・・・

……それから数か月後……

黒沢洋介の死刑は執行された……。

『多くの人々のためになりたい』

それが自分の命を尽きることで、日本の人々が喜んでくれる意味をもはらんでい

るのだとしたら……

この瞬間に洋介の夢は叶ったのだろうか……

……いや……決してそうは、思わない……！！

……ある日、大介は歩いていた。

キヤスタースーツケースを引いて、前を見据えて前進していく。

「山口警視……！」

ふと、後ろから声をかけられた。

大介が後ろを向くと、洋介の自爆に立ち合った2人の若い刑事だった。

「お前達……何やってるんだ！？こんなところで……」

大介は驚きながら、2人に尋ねた。

「山口警視はどこにいかれるんですか？」

1人が笑いながら尋ねる。

「……俺か？俺は妻とも別れたし、警察も捨てたからな。……世界で1からスタートし

ようと思ってる……！！」

大介が笑いながら答えると、2人がにやにや顔で互いの顔を見合わせる。

「なんだ…？どうしたんだ？」

1人が尋ねる。

「俺たちもついていっていいですか！？」

もう1人も続ける。

「俺たちも警察辞めたんです。…俺たち、山口警視にどこでもついていきますよ！！」

「

大介は驚いた顔で

「…いや、でもお前ら…」

「パスポートならこの通り！！」

大介が言い終わらないうちに、2人は上着のポケットからパスポートを取り出し、目

の前に掲げてニカリと笑った。

大介はまだ目が真ん丸としていたが、やがて笑いだし、2人の肩を抱いた。

「行くぞ！！」

大介は振り替えて、胸を張りまた前進し始めた。

2人は笑いながら顔を見合わせた。

「はい！！」

青々とした、雲1つない空だった。

オシマイ

……目を開けると見知らぬ世界だった。

洋介は、いや洋介と呼ばれていた男は、起き上がると頭を掻いた。

『ここはどこだ？』男はそう思うと、ふらつく足で歩きだした……
…。

『今度は人々のためになる人生を送りたい』

そう心から本気で思い、仲間たちが命を捨ててまで蘇らせた黒沢洋介の最期は…

日本中の人々から罵声を浴びせられ、死刑となり…

そして再びこの世界にやってきて…

今度は記憶を与えてくれ、手を差し伸べてくれる仲間がいらないこの世界を

永遠に…彷徨い続けるのである……

悲しみの果てに……

人は何を、

追い求めるのでしょうか…？

オシマイ（後書き）

お読みになってくださった方、ありがとうございます。

後々から読み返してみるとやっぱり「なんか変だ。」と思ってしま
う箇所が沢山あります。文章レベルとか……。漢字の使い方とか。
……。表現の仕方とか……。でも、おそらく今もさほど向上して
いないんだろうなとも思ってます。

この作品についての感想は「どうして洋介たちは生前に数万人（笑）
もの人々を殺害する事件を起こしたのかというその理由を書いてな
いじゃないですか。この作者は。」というのが今の一番の感想です。
でももう数年も前のことなのでもう書く気おきません。

他にも執筆した小説をこちらのサイトに移そうかと考えていたので
すがコピーしてペーストするのが異様に疲れますね（笑）。という
か目が痛い。

こんな作者ですがどうぞよろしくお願いします。

【登場人物紹介】

黒沢洋介

松崎茜

北沢諒子

今井竜

中山強

工藤謙治

高橋和也

木村絵里

星野和義

松本広一

斎藤孝志

松本康次

山口大介

【Last Smile】

「作品」

2002年

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1313i/>

Last Smile

2010年10月26日15時17分発行